

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03845

研究課題名(和文) 旧産炭地における産業遺産と地域再生 日本・フランス・イギリスの国際比較研究

研究課題名(英文) Industrial heritage and Urban regeneration: Comparative study among Japan, France and UK

研究代表者

松浦 雄介 (MATSUURA, Yusuke)

熊本大学・大学院人文社会科学部(文)・教授

研究者番号：10363516

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本の三池炭鉱、フランスのノール=パ・ド・カレー炭鉱、イギリスのロンダ炭鉱を事例として、炭鉱をめぐる集合的記憶、炭鉱の文化遺産化、産業遺産の活用による地域再生の試みなどについて比較研究を行った。その結果、脱工業化やグローバル化などによって衰退した地方工業都市が産業遺産の活用によって地域再生を図る点で三つの事例は共通しているものの、集合的記憶の内実や文化遺産化の過程に違いがみられた。それらの結果について、学会や国際シンポジウムで報告するとともに、学術論文や短文を執筆した。

研究成果の概要(英文)：Based on research on Miike(Japan), Nord=Pas de Calais(France) and Rhondda UK), I investigated collective memory of coalmine, process of heritage making, urban regeneration through usage of industrial heritage. Although the three cases share the general context of the regeneration process, they differ from each other in contents of collective memory, process of heritage making. I did several presentations in symposiums and wrote several papers including a journal article.

研究分野：文化社会学

キーワード：文化遺産、文化資源、脱工業化、グローバル化、三池炭鉱、ノール=パ・ド・カレー炭鉱、ロンダ炭鉱、産業遺産

1. 研究開始当初の背景

私はこれまで三池炭鉱をフィールドとして、炭鉱遺構の産業遺産化の過程や文化遺産と集合的記憶との関係などについて研究してきた。遺産化をつうじて再構成された歴史と元炭鉱労働者をはじめとする地域住民の集合的記憶とのあいだには距離が見られ、それもあって産業遺産の保存活用にたいする地域住民の関与は限定的である。この点について産業遺産の保存活用の先進国であるヨーロッパの諸事例と比較することにより、どのような違いがあるかを明らかにしようと考えた。

2. 研究の目的

上述の通り、私はこれまで三池炭鉱を事例として、炭鉱遺構の産業遺産化の過程や文化遺産と集合的記憶との関係などについて研究してきた。文化遺産として歴史が再構成されるなかで、「負の遺産」とも呼ばれる否定的な過去は周縁化されており、それもあって負の遺産の記憶にこだわる元労働者をはじめ、地域住民のなかには遺産の保存活用に距離を置こうとする人々がいる。負の遺産(事故や病気、争議など)は、どの炭鉱においても見られうるものである。そこで産業遺産の保存活用にかんして日本よりも長い歴史を持つイギリスのロング炭鉱と、日本と同時期に遺産化を進めたフランスのノール＝パド・カレー炭鉱を事例とし比較研究を行い、遺産化の過程や集合的記憶との関係、産業遺産を活用した地域再生などについて三者間の異同を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

日本の三池炭鉱・フランスのノール＝パド・カレー炭鉱・イギリスのロング炭鉱について、フィールドワーク・インタビュー調査を行った。三池炭鉱については、毎年数回の現地調査を行った。ノール＝パド・カレー炭鉱については、2015年度と2016年度の二回、現地調査を行った。ロング炭鉱については、2017年度に現地調査を行った。また、文献調査も並行して行い、それらをもとに研究を行った。

4. 研究成果

(1)

上述の通り、私はこれまで三池炭鉱を事例として、炭鉱遺構の産業遺産化の過程や文化遺産と集合的記憶との関係などについて研究してきた。文化遺産として歴史が再構成されるなかで、三池炭鉱の「負の遺産」とも呼ばれる否定的な過去は周縁化されており、それもあって負の遺産の記憶にこだわる元労働者をはじめ、地域住民のなかには遺産の保存

活用に距離を置こうとすることを、明らかにしてきた。

これらの研究をさらに深めるために、三池炭鉱でのフィールドワーク調査を継続的に行った。負の遺産にかんしては、地域住民によって行われているさまざまな記憶実践に注目し、爆発事故や明治から戦前にかけての囚人労働、戦中の強制労働などの出来事についての慰霊碑建設および慰霊祭などについて調査した。その結果については関西社会学会の大会シンポジウムで報告し、機関紙『フォーラム現代社会学』に論文を執筆した。また、九州大学で行われた国際シンポジウム'Border of memory'でも報告した。三池炭鉱を含む九州の産業遺産はまとめて「明治日本の産業革命遺産」として、2015年にユネスコ世界文化遺産に登録された。しかし、そこに第二次大戦中の強制労働への言及がなかったために、韓国や中国からの批判を招き、いわゆる歴史認識をめぐる国家間の対立を再燃させるものとして認識されたが、ローカルな次元で見ると、地元の元労働者をはじめとする住民の中にも、負の歴史が含まれていないことを理由にこの世界遺産に賛成ではない人もいること、それゆえ記憶の分断線は単に国家間にあるのではなく、地域の内部にあることを論じた。この報告をもとに論文を執筆し、英文雑誌 Japan Forum に投稿して現在査読中である。

(2)

本科学研究費研究のもう一つのテーマである「産業遺産を活用した地域再生」についても研究を行った。産業遺産による地域再生とは、炭鉱施設など工業生産のための施設などを文化遺産に指定したうえで、さらにさまざまな用途(観光やまちづくりなど)に資する文化資源として活用することを意味する。そこで今日多くの地方都市が試みている、文化による地域再生の歴史的背景およびその試みの今日的な特徴について明らかにした。

戦後日本において中央と地方との格差が意識され、地域の自立をつうじた再生が論じられるようになったのは、高度経済成長が終わり、「地方の時代」と言われた1970年代後半あたりからである。この時期は「文化の時代」とも言われ、地域を文化の力で活性化することが盛んに言われるようになった。この時代の地域文化政策は、「普遍主義/地域主義」および「ハード志向/ソフト志向」という二つの軸で分類・整理できる。その後のバブル時代には「ハード志向+普遍主義」の傾向が強まったが、バブルが崩壊し、新自由主義的傾向が強まるにつれて、既存のハードを再利用して地域主義的文化を促進する傾向が多く見られるようになった。

こういった状況において、もともと文化資源を有しない地域が、さまざまな地域の物語(ストーリー)を創り出し、それによって既存のものを新たに文化資源とし、それを観光

やまちづくりに活用している状況を論じ、なぜ今日の地域づくりにおいてストーリーがキーワードとなり、文化遺産がしばしばそのストーリーを担うモノとなっているかを明らかにした。これらについて、山口大学時間学研究所のセミナーで報告し、同所が作成・出版した図書に寄稿した。

また、2018年5月20日に九州大学で行われた西日本社会学会の大会シンポジウムで、文化の資源化について、文化遺産を中心に報告をした。

(3)

炭鉱労働は地下の坑内での危険をとまなう労働である。それゆえ、事故や病気などの負の出来事は、ほとんどの炭鉱において見られるものである。ところが三池炭鉱を含む九州の産業遺産がまとめて「明治日本の産業革命遺産」とされたとき、そこにそれらの負の側面は含まれなかった。また、遺産化の過程で元労働者をはじめとする住民の参加はきわめて限定的であり、また元労働者たち自身も距離をとる傾向が見られた。

そこで産業遺産の保存活用にかんして日本よりも長い歴史を持つイギリスのロンダ炭鉱と、日本と同時期に遺産化を進めたフランスのノール＝パ・ド・カレー炭鉱について、三池炭鉱の比較対象として調査研究を行い、遺産化の過程や集合的記憶との関係についての三事例間での異同を明らかにすることを目指した。

ノール＝パ・ド・カレー炭鉱の地元では、閉山の前後で人口は日本の産炭地ほど減少しなかったものの、失業率が上昇し、衰退が進行した。地域活性化の一環として、地元の議員が中心となって推進団体「Bassin minier uni」をつくり、ユネスコ世界遺産への登録運動を展開した。その過程で、住民参加型のシンポジウムをたびたび開催し、運動に関係するアクターのネットワーク化を進めた。また、同地域で炭鉱の負の遺産として人々が記憶するのは爆発事故とじん肺である。それらはノール＝パ・ド・カレー炭鉱の世界遺産登録に際して作成されたパンフレットなどにも記されており、世界遺産から排除されていない。

同炭鉱には激しい労働争議の歴史もあるが、フランスでは労働者が自らの権利のために争議などの形で実力行使をすることは普通のこととされており、負の遺産とはみなされていない。

これらのことから、ノール＝パ・ド・カレー炭鉱の世界遺産登録は、三池炭鉱と同様に上(地方自治体の政治家)から推進されたが、前者は後者よりも多くの住民や市民の関与を促す形で展開された。そのため、世界遺産による地域づくりにおいて、住民や市民の参加が活発である。

ただし、世界遺産の観光活用に関しては、調査した時点(2016・2017年)では世界遺

産登録からまだ4~5年しか経過していないこともあり、まだ本格化しておらず、三池炭鉱と較べてもそれほど目立った違いはない。また、三池炭鉱との大きな相違点として、ノ2012年にルーブル美術館の分館が開館したことが挙げられる。これはフランス政府による「文化の地方分権」の一環としてなされたものだが、観光効果という点では世界遺産よりも遥かに高い。アートと文化遺産を組み合わせた文化政策は、日本では京都などで見られるが、産炭地では石狩炭田で小規模に見られるのみである。今後、日本の産炭地の地域再生においても参考になる点と思われる。

(4)

イギリスのロンダ炭鉱の場合、1983年に閉山した。80年代初頭、地元政府の再開発計画を知った二人の鉱山労働者(そのうちの1人はA氏)と鉱山労働者の娘、廃鉱写真家の4人が集まり、炭鉱施設の保存に向けて動いたことが、遺産化の始まりである。その後1989年に複数の自治体により開発された。その過程で遺産化の主導権がA氏たち市民から行政に移り、遺産化の方向性もA氏たちが当初臨んだ真野から変質してゆくが、A氏はその後も遺産化の運動への関与を続けた。同炭鉱が「ロンダ・ヘリテージ公園」として再整備されたとき、同氏は市民の立場から遺産化を推進するボランティア団体「ロンダ・ヘリテージ公園友の会」を立ち上げ、初代会長を務めた。

ロンダ・ヘリテージ公園のミュージアムは全体的に人(労働者や地域住民)に焦点を当てた展示となっており、事故や労働運動、炭鉱の衰退など負の側面も含めて取り上げられている。これは、元労働者たちが当初から関与したことにより、炭鉱の負の側面もミュージアムに包摂された結果と考えられる。

ただし、三池炭鉱やノール＝パ・ド・カレー炭鉱と同様に、ロンダ炭鉱も観光活用は限定的である。敷地の面積が限られており(実現の段階で当初の計画より縮小された)、関連施設や周囲の店もなく、年間来訪者は約60,000人と、経済効果は限られている

(5)

以上三つの炭鉱調査をまとめると、まず共通点としては、炭鉱閉山後の地域活性化として遺産化が進んだこと、その効果として地域住民の「誇り」を回復させるという心理的効果があった反面、観光活用による経済効果という面では限定的であることである。

他方、違いとしては、三池炭鉱と違い、ノール＝パ・ド・カレー炭鉱およびロンダ炭鉱では遺産化の過程で住民の関与が見られたこと、そのことと関連して、負の遺産も産業遺産の公的な歴史のなかに包含されていることである。また、三池炭鉱では負の遺産とされることもある労働争議がノール＝パ・

ド・カレー炭鉱やロンダ炭鉱では歴史の一部として位置づけられ、逆に三池炭鉱ではあまり注目されないじん肺の問題がノール＝パ・ド・カレー炭鉱では負の遺産とされるなど、過去のどの出来事が負の遺産とされるかも、各炭鉱ごとに違いが見られた。

産業遺産の活用による地域再生の実態については、本研究ではまだ限定的な調査しかできなかった。この点をさらに詳細に調査研究を行うことが、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

松浦雄介「負の遺産を記憶することの(不)可能性：三池炭鉱をめぐる集合的な表象と実践」『フォーラム現代社会学』第17号、149-163頁、2018年、査読有

〔学会発表〕(計3件)

松浦雄介「負の遺産を記憶することの(不)可能性」関西社会学会大会シンポジウム、神戸学院大学(兵庫県神戸市)、2017年5月28日

松浦雄介「文化を資源化する社会：文化遺産の観点から」西日本社会学会大会シンポジウム、九州大学(福岡県福岡市)、2018年5月20日

Yusuke MATSUURA, 'With or without mheritance-Memories of Miike coal mine', Borders of memory-national commemoration in East Asia, 九州大学(福岡県福岡市)、2016年12月18日

〔図書〕(計1件)

山口大学時間学研究所(監修)、時間学の構築編集委員会編『時間学の構築 物語と時間』(担当:松浦雄介「地域をつくる物語とその時間」)、恒星社厚生閣、2017年、231頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

松浦雄介「歴史と出会う調査」『労働と健康』266号、14-15頁、2018年3月

松浦雄介「三池炭鉱 世界遺産と負の遺産のあいだ」『労働と健康』265号、12-13頁、2018年1月

松浦雄介「社会学的実験室としての炭鉱」『出版ニュース』(8月上旬)、2016年8月

松浦雄介「『衰退』の語り方 - 地方から見るフランスの現在 - 」日仏社会学会ホームページコラム「A la recherche de Durkheim perdu」, No.10

6. 研究組織

(1)研究代表者

松浦 雄介(MATSUURA, Yusuke)
熊本大学人文社会科学部・教授
研究者番号：10363516

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()